

# 台湾数学会滞在記

国際交流担当理事・東京大学大学院数理科学研究科  
寺杣 友秀

台湾数学会は年会を毎年会場を持ち回りで開催しており、今年は国立嘉義大学蘭潭キャンパス (National Chiayi University) で行われた。日本数学会は2年に一度、訪問団を送っており、今年がその年にあたっている。今年も6人の講演者と小菌英雄理事長以下、徳永浩雄氏と私の理事3人で嘉義に滞在し、12月9日、10日の2日間の日程で行われる台湾数学会年会に参加した。今回は例年になく、代数分野から戸田幸伸氏、阿部知行氏、幾何分野から遠藤久顕氏、芥川和雄氏および解析分野から柳田英二氏、水谷治哉氏という精鋭数学者6人を招待講演として送り大訪問団となった。

私たち3名の理事団は前日の8日に台北の松山空港に降り立ち、事務局長の夏さんの出迎えを受けた。夏さんは偏微分方程式研究のつながりで、小菌理事長とはすでに面識があるということであった。そのまま台北の誇る101ビルのもとで昼食をとったあと高速鉄道(新幹線)に乗り込んだ。新幹線は日本で作っているらしく、日本の新幹線とまったく同じ車両だ。テロップなども全く同じ雰囲気だ。“We will make a brief stop at Chaiyi” などという、なんとなくほか丁寧なアナウンスもまったく日本的だ。新幹線は広がるさとうきび畑を通り過ぎ、高鐵嘉義についた。

次の朝、年会のオープニング・セレモニーが200人くらいの階段教室で行われた。階段教室はほぼ満杯であったが、オープニングセレモニー以外の参加者も入れると200人はおおきく超えるはずだ。台湾数学会の会員全体が400人くらいというから、会員の半分以上の人が年会に参加していることになる。日本数学会の会員数がざっくり5000人くらいであることを考えると、もし同じような会員全体に対する参加比で年会が行われたとすると、大変な動員人数になるだろう。オープニング・セレモニーでは応用数学の学会の理事長と隣になった。セレモニーが始まる前に、色々台湾で有名な日本人について話を伺った。皆さんは八田與一という台湾で活躍された方をご存知だろうか？ 私は存じ上げず、冷や汗ものだった。2週間前に八田與一の生まれ故郷である金沢を訪れたとおっしゃっていた。後で知ったのだが、八田與一は大規模な灌漑用水を作ったことで有名な土木建築家で、映画「KANO」(嘉農=嘉義農林学校、後述)にも登場する。オープニング・セレモニーで数学を題材にした呉(ウー)さんのアートの展示会につ

いても紹介されていたようだった。これは中国語での紹介だったが、文章の意味は漢字から何となく推測される。

オープニング・セレモニーのあとは、学会の集合写真の撮影が行われ、講演が行われた。集合写真撮影の会場でジュンカイ・チェンさんと話す機会があった。ジュンカイ・チェンさんは次回ブラジル・リオでの国際数学会議で、中国のメン・チェンさんとの共同講演で招待講演者として招待されている、著名な代数幾何学者で、前台湾数学会の理事長でもある。

講演は代数、幾何、解析、偏微分方程式の他、応用数学関連分野など11の分野によるパラレル・セッションで行われ、1日目は50分の長い講演、2日目は25分の短い講演というプログラム構成であった。日本人の6つの招待講演は50分の講演ので行われた。それ以外の台湾数学会の講演でも英語の講演もあり、私の専門に近い数論幾何のチャイフー・ユーさんの講演も聞きに行ったが、講演は英語で行われた。本田-テイト理論を用いて2次元、あるいはさらに高次元の超特異アーベル多様体や超特殊アーベル多様体の数を数えるという話で、興味深い話だった。こういった方面の数学では井草準一先生を始めとする日本人数学者の研究もたくさんあり、親近感を感じるものである。日本数学会の講演では、日本人が行うときは日本語による発表が前提になっているが、発表言語は英語、日本語のいずれかを選ぶようにできると、外国人が参加しやすくなるのかもしれない。特に企画特別講演、特別講演は世界を代表する著名な数学者による講演が多いので、英語の講演があれば、たまたま日本にいる外国人数学者にも数学の年会を観光目的の意味だけではなく、研究情報収集の機会としても楽しんでもらえるのではないだろうか？

講演の合間に大学校内を散策した。もともと農業を中心とした特徴の大学のせいか、校内に稲栽培の実習田があったりで実に広々としたキャンパスであった。戦前の高校野球（そのころは全国中学生野球大会）では台湾代表として嘉義農林学校が出場して、準優勝を勝ち取ったことは有名で、「天下の嘉農」（「天下之嘉農」ではない。）と書かれたモニュメントが大学内に建立されているくらいだ。日本から来た近藤兵太郎監督のもとで強力なチームがつくられたことの顛末に「KANO」という映画もあり、監督と主力選手のモニュメントもある（写真）。大衆のスポーツとして野球が広まっていることも、日本との共通点の一つだ。

数学に関していえば、純粋数学より応用数学が盛んで、この学会の主催も応用数学を中心とした学部ということだ。小高いところに立っている図書館ではオープニングで紹介のビデオを流していた、ブロック・アートの展示が行われてい



た。これはレゴみたいなブロックでフラクタル図形など、幾何学を題材とした創作物である。体験的に自分でも作るようなスペースも設けられていて、数学会と並行して、アウトリーチ活動にも並々ならぬ力の入れようを感じた。実際に指導している呉さんはすでに10年以上この種の創作活動にかかわっているということだった。おそらく高校生が来ても十分に楽しめるものだと思う。

学会1日目の夜は懇親会だった。日本数学会の懇親会との違いを感じたのは、懇親会への参加人数の多いことだ。日本数学会の懇親会のように、立食の軽い食事と飲み物がでてくるものを想像していたが、想像をはるかに超える、盛大なものであった。パーティーでは理事長のミンチー・ライさんと同じテーブルに招かれた。先ほどオープニングだけでも200人くらいはいるであろうと述べたが、この懇親会もほぼそれと同じくらいの人に参加しており、10人掛けの中華料理のくるくる回る丸テーブルが会場いっぱいにならされている景色は壮観だった。後で聞いたら学会は参加費制でその参加費には懇親会費も含まれているという話だった。つぎから次に運ばれてくる中華料理に一同は大満足だった。

このような盛大な懇親会ではあったが、ひとつ驚いたのは、懇親会にアルコール類が出てこなかったことだ。アルコール類は各自で注文することもできるということだったが、このような食事会でビールなどのアルコールが出てこないというのは全く普通のことだそうだ。セミナーなどが終わってみんなで出かけるときもアルコールは飲まないことが多いそうだ。

ホテルの近くに屋台街があるということを聞いて懇親会のあとで、数人で出か

けたが、そのときにも台湾の不飲酒戒を実感した。9時を過ぎたような時間でも人はいっぱいであったが、居酒屋風のところはあまりなく、麺類や中華まんじゅうのようなものを食べている子供連れ家族でいっぱいだった。ぶらぶらしていると「居酒屋」（これは日本語？）という看板があったので入ってみると、閑散としていた。居酒屋とはいうものの、冷蔵庫にはビールが入っているのみだった。お店の人に「紹興酒はあるか」と聞いてみると、一度はないと言って引っ込んでいったが、再びやってきて、「1本か2本か」と聞いてくるのだ。「1本頼む」と頼みつつ、なんとなく腑に落ちない感じで待っていると、お店の人は余程暇なのか、出て行って近くの酒屋に買いに行ってくれていたようで、所望の一本が現われた。居酒屋でビール以外のお酒を飲む人は、余程珍しいのだろうか？ そもそもお客さん自身が珍しいのかもしれない。

2日目は午後には帰国の予定になっていたので、講演には出席しなかったが、実質2日間の年会は日本数学会の年会に比べるとあっという間に過ぎていく感じだ。

タクシーから眺める嘉義市街の景色にもごく普通に「吉野家」や「すき家」は溶け込んでいるし、ファミリーマートも、そこかしこに遍在している。以前台湾に訪れたときもそうであったが、今回の嘉義への滞在もその御多分にもれず、日本とのつながりをとても感じる事ができた。現在でも様々な方向からの交流があることの証だろう。

台湾数学会との交流は文頭でも述べたように、日本から2年に一度、訪問団を送っている他、台湾数学会からも隔年で日本数学会に訪問団が来ており、訪問団と理事会で食事の機会を設けるなど、交流の機会を持っている。一般に国際交流は、始めることには多くのエネルギーが割かれるとは思いますが、途絶えずに継続することはそれと同様か、あるいはそれ以上に多くのエネルギーを必要とするものである。数学会のレベルでも、台湾と日本は友好的な関係にあり、双方それを保ち続けてきたことは貴重な財産と言えよう。実際に台湾の数学会に参加して、そこにいる数学者たちに触れることでそれを感じることができた。これはその場に居合わせなければ、なかなか得がたい貴重な体験であり、今回は、台湾との友好関係の大切さを痛感した滞在であった。今後ともこの友好関係が末永く続くことを切に願うばかりである。